

東アジアと福岡

East Asia Fukuoka

第2回 7月29日(土)

古墳時代における 九州北部と朝鮮半島 とのつながり

国立歴史民俗博物館研究部
高田 貫太氏

入場無料

会場

福岡市博物館
1階講座室

(福岡早良区百道浜3丁目1-1)

時間

13時30分～15時00分

※各回の定員や申込方法は、市ホームページでお知らせします。

主催・問い合わせ先

福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田 2-1-94
TEL: 092-571-2921 FAX: 092-571-2825
電子メール: maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

埋蔵文化財センター
ホームページ



※会場は福岡市博物館になりますので、ご注意ください。

令和5年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座
へんかく
ちょうわ
変革と調和の
交流史
2000年

古墳時代における九州北部と朝鮮半島のつながり

—考古学による日朝関係史から見た「磐井の乱」—

20230729 高田貫太

1. 本講座の目的

古墳時代の中・北部九州地域は、その地勢や朝鮮半島系資料の分布からも明瞭なように、古くから朝鮮半島とつながりを持ち、多様な渡来文化を受容、展開した（図1）。

本講座では、次の3つについて検討する。

- ① 5～6世紀前半代における日朝関係の動向を中・北部九州地域に焦点を定めて、考古学的に整理する。その際に、中・北部九州地域や朝鮮半島中南部における、両地域の関係を示す特徴的な古墳資料を中心に扱う。
- ② ①の整理に基づいて中・北部九州地域の主体的で多様な交渉様態を整理する。
- ③ 多様な対朝鮮半島交渉を重ねる中・北部九州地域と対外交渉権の一元化を志向する倭王権の葛藤の中に、「筑紫君磐井の乱」の要因の一つをみだし、それがどのように考古資料に反映されているのか、について予察する。

①と②は、2～4節で、おおむね5世紀前半、5世紀後半、6世紀前半という時期ごとに概観する。③については5節で検討する。

※ 本講座では「主体的」な交渉という表現を用いることがあるが、これは倭王権と全く関わりをもたない地域社会独自の交渉だけを意味しているわけではない。諸地域社会の側からみれば、倭王権の外交活動に積極的に参与するなかで、そこで自らの交渉目的を達成しようという動きもまた、「主体的」な交渉活動として評価すべきと考える。検討すべきは、倭王権の関与がどの程度であったのかという点にある。

2. 5世紀前半の状況

(1) 北部九州地域の対朝鮮半島交渉

a. 月岡古墳—倭王権の外交に参与するようなあり方

5世紀前半における北部九州地域の対朝鮮半島交渉を示す考古資料として、特に注目できる古墳は、福岡県うきは市月岡古墳（墳丘長80mの前方後円墳 図2）。

多様な朝鮮半島系副葬品 埋葬施設は長持形石棺を納める竪穴式石室。石棺内部や石室壁体と石棺の間の床面から、龍文透彫・草葉文透彫帯金具、胡籙、長柄輪鏝、籠手（肱甲）などの朝鮮半島系副葬品が出土。形態や製作技法の比較から、帯金具は新羅、長柄輪鏝は百済・大加耶とのつながりを考えることができる（以下、「～系」とする）また、胡籙や籠手は新羅系と確定はできないが、朝鮮半島の洛東江以東地域を中心に分布する。

古墳の立地と周辺 月岡古墳は、有明海から筑後川を遡上し、浮羽—日田—豊前（周防灘）・豊後（別府湾）という東西を結ぶ交通路と、博多湾—朝倉—浮羽へ至る交通路の結節点に位置する（橋本2010、杉井2010）。古墳の周辺には、早くにカマドを導入した集落（塚堂遺跡や仁右衛門畑遺跡）が展開する。これらの集落遺跡では、朝鮮半島系の軟質土器やU字形刃先、青銅製三累環頭（大刀）などが出土。この地で定着を図る渡来人集団の存在が想定できる。→単発的ではない朝鮮半島中南部との頻繁な交流が行われていた可能性が高い。

畿内地域とのつながり 埋葬施設の長持形石棺は、畿内地域の最上位の有力者層を中心に用いられたものを忠実に模倣する。それを竪穴式石室に納める事例は、北部九州地域では他に例をみない。金銅装眉庇付冑の副葬や窖窯導入期の埴輪の採用などにも畿内的な色彩が色濃く認められる。また、龍文透彫透彫製品は畿内地域を中心に分布する（図3）。

→対朝鮮半島交渉の多様な経路を有していた浮羽地域の上位有力者層が、倭王権（もしくはそれを構成する上位有力者）と結びつき、その政治経済的な関係を基盤として、王権の外交活動に参加するというあり方を想定することが可能。

b. 堤蓮町古墳群（図 4）—九州北部のより主体的な交渉様態

系譜の異なる朝鮮半島系副葬品 堤蓮町古墳群は、浮羽と同様に交通の要衝たる朝倉地域に位置する。1号墳は直径 18~20m ほどの円墳。漢城百済系の垂飾付耳飾と洛東江以東地域系の青銅製三累環頭（大刀）を副葬する。2号墳も埋葬施設内に初期須恵器を副葬するという新来の葬送儀礼を執り行っている。

周辺の遺跡 近隣には一帯を統括する有力者の墳墓で、金銅製胡籥などの朝鮮半島系副葬品が出土した堤当正寺古墳（前方後円墳 墳丘長 70m）や、初期須恵器を生産した朝倉古窯址群、その操業に携わった渡来人集団の墓域たる池の上・古寺墳墓群が位置する。

調査報告者の見解 1号墳の被葬者は古墳の特徴からみて「畿内政権の官僚像だけでは説明できないもの」があり、「池の上・古寺の被葬者集団を率いてきた指導者的な立場で、独自の地位・存在・権威であったこと」、堤蓮町古墳群の造営集団と「半島とのコネクションが保たれてきたこと」が指摘されている（吉武 1999 72 頁）。加えて、① 堤蓮町 1号墳の副葬品の系譜からみると、その「半島とのコネクション」は多元的であり、② 埋葬施設には畿内的な要素は確認できない、なども指摘できる。

渡来人集団をとりまく階層性 堤当正寺（最上位の有力者）—堤蓮町（渡来人集団の統率者的立場）—池の上・古寺（渡来人集団）という階層性の存在。

→堤蓮町 1号墳のような朝鮮半島系色彩の濃い中小古墳の被葬者が、堤当正寺古墳の被葬者のような北部九州地域の最上位有力者層の対外交渉を実質的に担っていた可能性。

（2）朝鮮半島西南海岸地域の「倭系古墳」と北部九州地域

近年、西南海岸地域で 5 世紀前半頃の「倭系古墳」が相次いで確認されている（図 5）。

「倭系古墳」の特徴 ① 中小円墳で臨海性の高い立地で単独で造営される。② 葺石の存在や埋葬施設、副葬品の内容などに倭の中小円墳との共通性が高い。③ 特に埋葬施設（竪穴式石室や箱式石棺）の構造は、北部九州地域と共通する（図 6）。④ 副葬品は、倭で定型化した帯金式甲冑や武器が主体。

造営集団の性格 倭と百済・栄山江流域の交渉を実質的に担い、現地集団との交流も深めた倭系の渡来人集団と推定できる。もともとの根拠地は北部九州地域の可能性が高い一方で、いずれの古墳にも帯金式甲冑が副葬されており、倭王権とのつながりも有し、その外交にも従事するような役割を担っていたようである。（高田 2014b）

（3）北部九州地域の 2 つの交渉様態

北部九州地域における有力首長層の対朝鮮半島交渉には、大きくみると、① 倭王権主導の外交に積極的に参加しつつその意図のもとで活動するような形態とともに、② 堤蓮町 1号墳の被葬者のような対外交渉に長けた人物を傘下に置き、独自の対朝鮮半島交渉も積極的に行う、というような、2 つの様態が存在したと判断できる。このような交渉様態の多様性が朝鮮半島系副葬品の分布に反映されている可能性がある。一例として初期馬具（長柄輪鏝と短柄輪鏝）の分布の違い（図 7）。

北部九州地域の交渉相手は、百済、栄山江流域、大加耶、新羅など様々。ただ、他の地域社会と比較すると、新羅（洛東江以東地域）や洛東江下流域とのつながりが色濃い。

3. 5世紀後半の状況

5世紀後半も基本的には2つの交渉様態は維持されたようである。ただ、玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域では、倭王権とのかかわりという点で対照的な側面もある。

(1) 北部九州地域（玄界灘沿岸）の対朝鮮半島交渉

a. 遠賀川上流域・宗像地域と新羅—地域社会の主体的な交渉

福岡県櫛山古墳の新羅系帯金具 遠賀川上流域の福岡県櫛山古墳（図8-1）から出土した金銅製の三葉文透彫帯金具。三葉文透彫帯金具は洛東江以東地域に分布し、新羅の社会統合の表象たる服飾品の1つとして評価されている。5世紀後半の典型的な新羅系帯金具としては、ほぼ唯一の出土例で、新羅から直接もたらされた可能性が高い。他にも、初期の剣菱形杏葉や棘楕円形鏡板付轡（百済・大加耶系）やゴホウラ製貝輪なども出土。

新羅とのつながりを示す副葬品や埋葬施設（図8） 遠賀川上流域と新羅との直接的なつながりを示す資料には、装飾馬具（長柄輪鏡、金銅製偏円魚尾形杏葉など）、竪穴系横口式石室（セスドノ古墳や猫迫1号墳：大邱飛山洞37号墳と類似）、土器など様々。

新羅系資料と百済・大加耶系資料の混在 このような新羅系資料は、百済・大加耶系資料と混在して確認される。例えば、小正西古墳1号石室で（図9）は、百済・大加耶系の刀身式鉄鉾や鉄製f字形鏡板付轡、木心鉄板張壺鏡とともに、新羅系の長柄輪鏡があわせて出土している。このような状況は、同時期の日本列島の他地域ではあまり認められない。

宗像地域の類似した状況—福岡県勝浦井ノ浦古墳 宗像地域の津屋崎古墳群に属する勝浦井ノ浦古墳前方部石室（図8-6）も類似した様相。洛東江以東地域と構造が共通する竪穴系横口式石室から、百済・大加耶系の装飾馬具（剣菱形杏葉や木心鉄板張壺鏡）が出土。

被葬者の性格と役割 それぞれ中大型円墳、横穴墓、前方後円墳前方部の埋葬施設という特徴。畿内地域とのつながりはさほど顕著ではない。両地域ともに集落遺跡からも渡来人の存在を示す資料が豊富に出土。おそらく被葬者は、玄界灘沿岸地域の独自性の強い対朝鮮半島交渉に直接的に従事し、その中で様々な渡来文化を受容していた。その動きは、相対的に（日本列島の他地域と比較して）新羅との結びつきが強い。

b. 塚堂古墳—倭王権の外交に参与する様態

月岡古墳につづく首長墳 若宮古墳群の中で月岡古墳の次に造営された前方後円墳（墳丘長91m）。百済・大加耶系の武器や装飾馬具をはじめ、胡籥、龍文浮彫杏葉、青銅製熨斗など豊富な朝鮮半島系の副葬品が出土している。

畿内とのつながり 月岡古墳と同様に畿内的な埴輪を採用（高橋2003）しており、基本的には倭王権との王権の外交活動に参与する有力首長として被葬者を評価できそうである。ただし、月岡古墳と異なり、埋葬施設は北部九州型の初期横穴式石室である点から、これを共有する北部九州地域の様々な地域との密接な連携がうかがえる。

(2) 中部九州地域（有明海・八代海沿岸）の対朝鮮半島交渉

江田船山古墳出土の百済・大加耶系装身具 有明海・八代海沿岸地域の対朝鮮半島交渉の特色を際立たせるのは、江田船山古墳（初葬段階）の百済・大加耶系装身具（図10上）。このような装身具は5世紀後半の瀬戸内、若狭湾沿岸、紀伊、武蔵、東京湾東岸、上毛野などで分布（和歌山県大谷古墳、福井県西塚古墳、埼玉県埼玉稻荷山古墳など 図11）。

このような百済・大加耶系副葬品を有する中大型前方後円墳には、①豊富な朝鮮半島系副葬品を有するとともに、②帯金式甲冑や新来の中国鏡（同型鏡群）のような倭王権との政治的関係を示す副葬品も確認できる、という共通性をみいだすことができる。

朴天秀による「大伽耶型の威信財」という評価 ①について、初期の装飾馬具、装身具、多角形袋式鉄銚など副葬品構成の定型性を読みとれる。朴天秀はこれを「大伽耶型の威信財」と評価し、それらを副葬する古墳の被葬者を、各地域社会で新しく台頭し、大加耶と結びついた新興勢力と解釈した（朴天秀 1998 図 10）。百済との関わり（例えば江田船山古墳出土冠帽など）や朝鮮半島系工人による倭における製作なども考慮すべきだが、対朝鮮半島交渉に積極的な倭各地の有力者という意味合いにおいて、氏の評価の妥当性は高い。

被葬者像と交渉様態 ②については倭王権との直接的なつながりを示す器物として評価されている。したがって、大加耶や百済との交渉を重ねつつ、倭王権と直接的な政治的関係を結んだ倭各地の上位有力者層の姿を想定できる。その対朝鮮半島交渉の様態（の 1 つ）として、日本列島の諸地域社会が倭王権とともに交渉主体を形成し、大加耶を中心とした朝鮮半島諸勢力と交渉を行うようなあり方を想定できる。

（3）朝鮮半島中南部における中・北部九州系資料

5 世紀後半には、朝鮮半島中南部の倭系資料は分布が大きく拡大する。釜山・金海地域、洛東江以西の内陸部（大加耶圏）、慶尚南道西部地域、西南海岸、栄山江流域、中西部地域（百済圏）などで確認できる。ただ、須恵器や武器・武具類、倭製鏡などの副葬品が中心で、その中から中・北部九州地域から移入された資料を判別することは、現状では難しい。※ただし、国立羅州文化財研究所で発掘調査が行われた羅州伏岩里丁村古墳の主石室は、北部九州系の横穴式石室であり、玄室から出土した須恵器の年代からみると、5 世紀後葉頃に（石室が）造営された可能性は高い。また、慶尚南道巨済長木古墳の埋葬施設も典型的な北部九州系の横穴式石室であり、6 世紀前葉頃の造営と考えられていたが、近年の研究ではその造営が 5 世紀後葉までさかのぼる可能性が提起されている。

（4）中・北部九州地域の交渉様態

玄界灘沿岸地域の対朝鮮半島交渉については、基本的には 5 世紀前半と同様に、倭王権に参与する様態とより主体性の強い様態の二つがあったと考えられる。

それに対して、有明海・八代海沿岸地域は、倭王権と直接的な関係を結びつつ、他の諸地域社会と「野合」（新納 2005）、「呉越同舟」をするような形での交渉を主に行っていたようである。そのつながりは西日本各地に分布する阿蘇石製刳拔式石棺や筑肥型横穴式石室の存在が示す。（高木 2002、柳沢 2014 など）

しかし、玄界灘沿岸地域では大加耶系副葬品（特に垂飾付耳飾と帯金具）のセット、すなわち朴天秀の「大伽耶型の威信財」を副葬する前方後円墳が、いまだ確認されていない。一方で、新羅系資料の分布は有明海・八代海沿岸地域では希薄である。このような状況に対朝鮮半島交渉における両地域の対照性がうかがえる。それだけ、中・北部九州地域の交渉活動は多角的であったと評価できる。

4. 6 世紀前半の状況

中・北部九州地域から出土した垂飾付耳飾に象徴されるように、朝鮮半島系資料の分布や系譜が大きく変動する時期である。また、栄山江流域の前方後円墳をはじめとして朝鮮半島中南部に中・北部九州系の横穴式石室墳が盛んに造営される時期である。

（1）中・北部九州地域と倭王権—垂飾付耳飾の分析から

※朝鮮半島では、百済、大加耶、新羅がそれぞれ特色のある垂飾付耳飾を製作・副葬している。それぞれの王権による社会統合の一環として、諸地域へ配布された装身具の 1 つと評価されている。日本列島出土の垂飾付耳飾は、細やかな系譜（≒製作地や製作工人の故地）の追究が可能な資料である。

八女古墳群の多様な朝鮮半島系資料（図 12 上） 磐井の寿陵とされる岩戸山古墳の石馬に表現された馬具。偏円魚尾形の飾り（杏葉）や特徴的な鞍の表現（後輪傾斜鞍）は、その造形にあたって新羅の馬装を強く意識していた可能性（諫早 2012）が提示されている。その一方で、立山山 8 号墳では大加耶系の「山梶子式」垂飾付耳飾が出土。

新羅系・百済系耳飾の分布 新羅系耳飾が玄界灘沿岸地域（遠賀川上流域と唐津平野地域）で確認できるのに対し、有明海・八代海沿岸地域では、菊池川下流域を中心に百済系垂飾付耳飾が新たに分布するようになる（図 14）。このような対照性は他の朝鮮半島系資料でも確認できる。玄界灘沿岸地域では、新羅圏でも有力首長墳にのみ副葬されるような馬具（伝長者の隈古墳出土の金銅装鞍 図 12 下）が確認できる。一方で、江田船山古墳（追葬段階）では、百済系の装身具（冠、耳飾、飾履）がセットで副葬されている。

長畑 1 号墳出土の新羅系耳飾 遠賀川上流域に位置する長畑 1 号墳から出土した垂飾付耳飾については、調査報告者の川述昭人・伊崎俊秋氏の以下のような傾聴すべき指摘がある。

香春町も『豊前国風土記（逸文）等』により新羅系渡来人との関係が指摘されていて、この長畑 1 号墳の垂飾付耳飾も新羅系渡来人が携えてきたものか、あるいは当地で製作したものかは判断できないにしても、朝鮮半島に由来する文物であることは疑いないところである（川述・伊崎ほか 1998 23、24 頁）。

実際に、長畑 1 号墳出土耳飾は洛東江以東地域を中心に分布する型式（図 15）であり、文献記録と考古資料が一致をみせる貴重な事例。

大加耶系耳飾の分布（図 13） 一方で 6 世紀前半になると、有明海・八代海沿岸地域のみならず玄界灘沿岸地域でも、大加耶系の耳飾が副葬されるようになる（重藤 2016）。その多くは「山梶子式」という木の実形の飾りを有する耳飾（図 16）。これは、中・北部九州地域と畿内地域（とその周辺）に限って分布する。

倭王権との関係の変化を示すか 垂飾付耳飾の様相に基づけば、5 世紀後半と同様に相対的に新羅との交渉を志向する玄界灘沿岸地域と、おそらく倭王権への参与の中で大加耶や百済とのつながりを志向する有明海・八代海沿岸地域という姿を読み取ることはできる。

しかし、5 世紀後半の状況と大きく異なるのは、玄界灘沿岸地域にも大加耶系耳飾が突如として副葬されるようになる点である。ここに、対朝鮮半島交渉をめぐる政治的関係に変動が生じた可能性をみたい。

（2）朝鮮半島中南部における中・北部九州系資料

5 世紀末～6 世紀前半には、栄山江流域（図 17）、南海岸、洛東江以西地域（図 18）の一带に、中・北部九州系の横穴式石室墳が築かれる（柳沢 2014 など）。

横穴式石室の類型 大きく 2 つの類型がある。

- ① 玄界灘沿岸地域から造墓工人が渡来して築造にあたったと考えられるもの。
- ② 石室の各部分に中・北部九州系の要素を確認できるが、全体的に独特な形態になるもの。

埴輪、棺、副葬品の多様な系譜 埴丘に埴輪（円筒形土製品）がめぐらされる場合が多いが、基本的には在地での製作品。棺には通有の木棺のほか、栄山江流域系の甕棺、百済系の装飾木棺、倭系の石棺や石屋形など多彩である。また、副葬品の系譜も、倭、百済、大加耶、そして新羅と実に多様である。その中で、百済系の装身具が少なからず出土。

分布と性格 栄山江流域では 14 基+α の前方後円墳に採用される場合が多い一方で、在地系の方台形古墳の中心的な埋葬施設としても採用される。栄山江流域の諸地域集団の主體的な対外交渉の産物として評価できる。その主な交渉相手の一つが、中・北部九州の地域社会であったことは確か。ただし、倭系副葬品の中に捩じり環頭大刀や三角穂式鉄鉾な

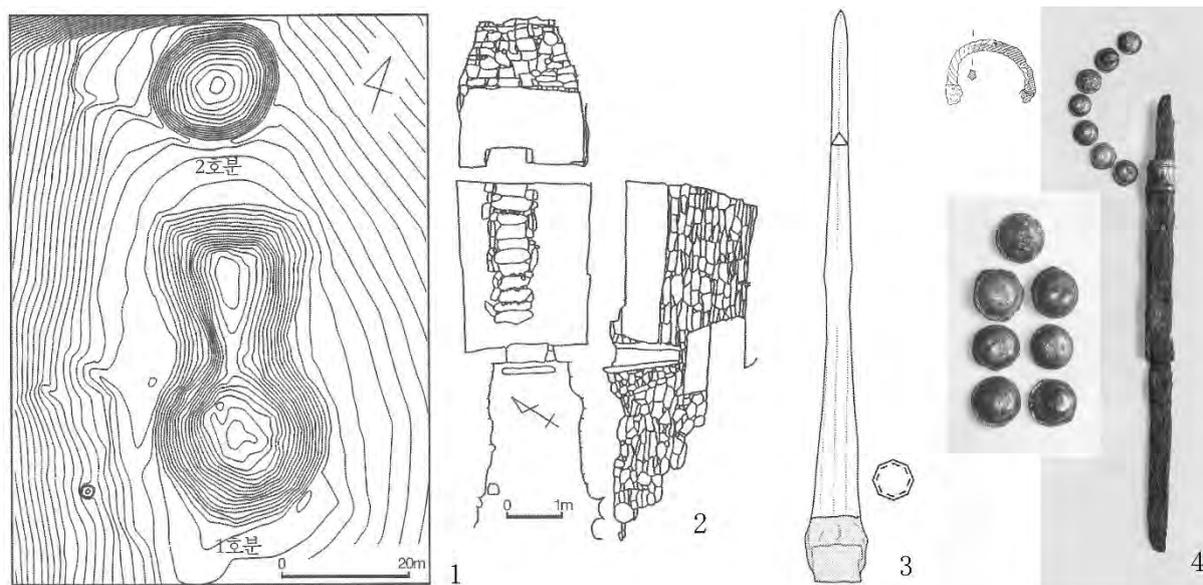


図 19 咸平新徳 1 号墳

1：墳丘 2：横穴式石室 3：三角穂式鉄針 4：振り環頭大刀

ど倭王権とのつながりを示す器物が含まれていることを重視すれば（例えば咸平新徳 1 号墳 図 19）、栄山江流域と中・北部九州地域の交渉に倭王権も関与したと考えられる。

朝鮮半島の南海岸や洛東江以西地域の九州系横穴式石室墳は、大加耶の交通路の要衝に分布したり、小加耶の盟主墳（固城松鶴洞 1 号墳 C 号石室）に採用される、という特徴を示す。その被葬者は、加耶や倭と深いパイプを持ち、多様な勢力とのつながりを仲介する役割を担っていたと評価できる（高田 2014b）。

中・北部九州地域の主体性 6 世紀前半の日朝関係も、多様な社会が多角的に結びつく錯綜したものであり、倭において主体的な役割を担ったのは中・北部九州地域と考えられる。しかし、九州系横穴式石室墳の造営は、6 世紀前葉がピークで、6 世紀中葉以後はほとんど確認できない。この点もまた、対朝鮮半島交渉をめぐる倭の中の政治的関係に変動が生じた状況を示している。

※ 近年では、公州や扶余地域で横穴墓の確認が相次いでいる。その造営時期はおおむね 6 世紀前半頃であり、北部九州系横穴式石室墳と類似する。24 基もの横穴墓が確認された公州丹芝里遺跡のような場合と、横穴式石室墳で構成される古墳群に混在して数基が築かれるような場合がある。横穴墓は百済圏では外来系の埋葬施設であり、倭との関わりが考えられる。韓国考古学界では、その被葬者を『日本書紀』雄略 23 年条の「筑紫國軍士五百人」と関連づける見解が提示されている（金洛中 2013）。ただ、横穴墓の系譜について果たして中・北部九州地域に限定できるのかを含めて、もう少し検討が必要である。

5 中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉と「磐井の乱」—古代史学と考古学の総合化

古代史学によって示された「磐井の乱」の内実と当時の対朝鮮半島交渉をめぐる考古学的な状況は、ある程度の対応関係を示す。

(1) 「磐井の乱」以前の状況

緊迫する朝鮮半島情勢と倭王権 5 世紀後半から 6 世紀前半にかけて、金官加耶の衰退と大加耶の台頭、百済の漢城陥落と熊津遷都、栄山江流域に対する百済の統合志向、己汶・多（滞）沙の領有をめぐる百済と大加耶の対立、そして新羅の加耶進攻など、朝鮮半島情勢は徐々に緊迫の度合いを深める。それによって、倭王権の対朝鮮半島外交が大きな支障をきたした可能性が高い。

倭王権の対応策の一つ 倭王権は朝鮮半島との多様なつながりを有した吉備地域の中樞

に打撃を加え、海上、河川交通に長けた吉備周縁の各地域集団を徴発、編成(高田 2014a)。いわゆる「吉備の反乱伝承」と対応する動き。しかし、520年代に、新羅は加耶への侵攻を本格化させたことで、倭王権はさらに対外交渉権の一元化を推し進めたと考えられる。

それを象徴する歴史的事件が、「筑紫君磐井の乱」ではないか。

(2)「磐井の乱」と考古学的状況の相関性

「磐井の乱」の動向(田中俊 1992、山尾 1999、熊谷 2001、吉田 2005、田中史 2005、森 2006 など)

- ① 524年に新羅が加耶への侵攻を本格化させ、「南加羅・喙己吞」に対して、第一次侵攻を行う。おそらく、その際に阿羅加耶(あるいは大加耶)などが倭王権への軍事的な支援を要請したと考えられる(田中 1992 227頁)。
- ② 倭王権がそれを受け入れ、「近江臣毛野」を将軍とする対新羅戦への軍事的派遣を計画する。
- ③ この時、倭王権が磐井に対して、その勢力下にあった「香椎潟」(玄界灘沿岸地域)の港湾を倭王権直属の施設とし、北部九州地域に対し軍事的動員をかけるように求めた可能性が高い(山尾 1999 206頁)。
- ④ 磐井は、その求めに応じるか、それとも反発するか迷いを重ねるが、新羅が磐井に対して密かに「貨賂」を送り、派兵阻止を要請する。
- ⑤ 磐井は新羅の要請を受諾し、倭王権の求めを拒否し、527年に「近江毛野臣」軍の渡海阻止のため、挙兵する。
- ⑥ 「磐井の乱」は、中央から派遣された「物部麁鹿火」によって鎮圧される。
- ⑦ 磐井の子の「筑紫君葛子」は、父の罪によって殺されることを恐れ、「糟屋屯倉」を献上することで贖罪を願った。

このような「磐井の乱」の動向と、これまで検討した考古学的な状況を総合化する。

朝鮮半島との多様なつながり 磐井が「外は海路を邀へて、高麗・百濟・新羅・任那等の国の年に職貢の船を誘り致し」(『日本書紀』継体 21年 6月甲午条)と記されているのは、倭王権の意図とは異なる北部九州の主体的な交渉活動を反映している可能性(森 2006)。これは、2～4節で検討してきたように、考古学的にも認められる。

倭王権と大加耶の密接な関係 ①、②のような倭王権と大加耶の密接な関係は、すでに述べてきたように、日本列島における大加耶系文物の様相から考古学的にも傍証される。

新羅と磐井 ④、⑤のように、新羅と磐井が「貨賂」のやり取りが可能なような密接な政治的関係にあったことに注目できる。このような関係は、これまで提示してきたような考古学的な玄界灘沿岸地域と新羅の不断のつながりの中で評価できそうである。

港湾施設の直轄地化 ③、⑦が示すように、乱勃発の契機と乱の帰結それぞれに、倭王権による玄界灘沿岸の港湾施設の直轄化(「香椎潟」と「糟屋屯倉」)、すなわち磐井の有した対外交渉権の接種運の動きが確認できる。福岡県古賀市鹿部田淵遺跡や福岡市比恵遺跡などの特殊な建物群が、糟屋屯倉や那津屯倉との関連で評価されている(藏富士 2011)。

「磐井の乱」の後 以上のような歴史的状況が背景にあって、倭王権の主要な交渉相手であった大加耶の垂飾付耳飾が、6世紀前半に玄界灘沿岸地域にも分布するようになった可能性がある(ただし、考古学的には、大加耶系耳飾の移入が「乱」に近い時期ということは提示できるが、厳密に「乱」の後と確定はできない)。朝鮮半島中南部地域における九州系横穴式石室墳の造営が6世紀中頃にはほぼ停止する状況も、同様の脈絡で評価したい。→ 中・北部九州地域の主体的な対朝鮮半島交渉は、「磐井の乱」を契機として大きく規制され、以後、倭王権の外交政策に恒常的に従事するようなものへと変質したと考えられる。

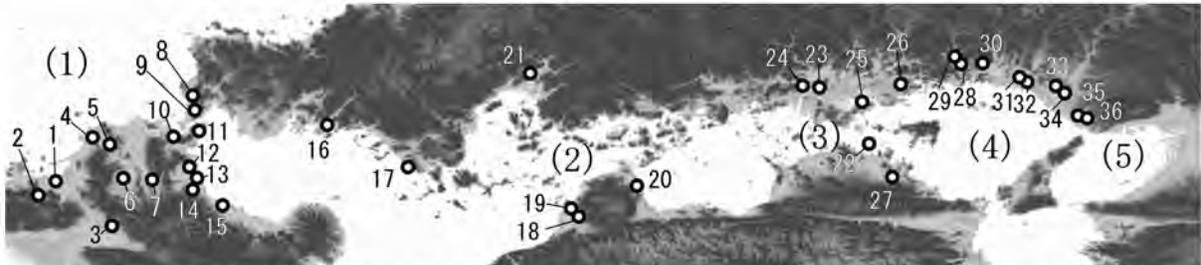
その後の日朝関係は、ひとまずは王権間の外交が大きな比重を占めるようになった。

引用・参考文献（発掘調査報告書については省略した。ご容赦いただきたい。）

- 諫早直人 2012「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州勢力の対外交渉』第 15 回九州前方後円墳研究会
北九州大会実行委員会
- 金洛中 2013「5～6 世紀南海岸地域における倭系古墳の特性と意義」『湖南考古学報』45
- 藏富士寛 2011「九州北部」『講座 日本の考古学 7 古墳時代（上）』青木書店
- 熊谷公男 2001『日本の歴史 03 大王から天皇へ』講談社
- 重藤輝行 2016「筑紫君磐井の乱と八女の古墳文化」『特別展「八女の名宝」』九州歴史資料館杉井 健 2010「肥後地
域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前
方後円墳研究会
- 高木恭二 2002「熊本の古墳からみた船山古墳」『東アジアと江田船山古墳』玉名歴史研究会 雄山閣
- 高田貫太 2014a『古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の交渉史—』吉川弘文館
- 高田貫太 2014b「5・6 世紀における百済、栄山江流域と倭の交渉—倭系古墳・前方後円墳の造営背景を中心に—」『全
南西南海岸地域の海上交流と古代文化』図書出版慧眼
- 高田貫太 2022「考古学による日朝関係史から見た『磐井の乱』—中・北部九州地域における対朝鮮半島交渉の様態
—」『国立歴史民俗博物館研究報告』231
- 高橋克壽 2003「5 世紀の日韓交渉と九州」『古代日韓交流の考古学的研究—葬制の比較研究—』科学研究費補助金研
究成果報告書
- 田中史生 2005『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』吉川弘文館
- 田中俊明 1992『大伽耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館
- 新納 泉 2005「経済モデルからみた前方後円墳の分布」『考古学研究』52-1 考古学研究会
- 朴天秀 1998「考古学からみた古代の韓・日交渉」『青丘学術論集』12 韓国文化振興財団
- 橋本達也 2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域
間関係の交流』高知大学人文社会科学系
- 森 公章 2006『戦争の日本史 1 東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館
- 柳沢一男 2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」』新泉社
- 山尾幸久 1999『筑紫君磐井の戦争—東アジアのなかの古代国家—』新日本出版社
- 吉田 晶 2005『古代日本の国家形成』新日本出版社
- 吉武孝礼 1999「まとめ」『堤蓮町遺跡』甘木市文化財調査報告書 47 甘木市教育委員会

※本講座は、高田 2022 の内容に基づいたものである。





- 1: 西新町遺跡 2: 吉武遺跡群 3: 堤蓮町1号墳 4: 勝浦峯ノ畑古墳 5: 富地原川原田遺跡 6: 小正西古墳
 7: セスドノ古墳 8: 吉母浜遺跡 9: 秋根遺跡 10: 小倉城下屋敷跡 11: 大積前田遺跡 12: 番塚古墳
 13: 稲童古墳群 14: 築城五反田遺跡 15: 池の口遺跡 16: 桑山塔ノ尾古墳 17: 御手洗遺跡
 18: 樽味遺跡群 19: 舟ヶ谷遺跡 20: 唐子台古墳群 21: 三王原古墳 22: 女木島丸山古墳
 23: 菅生小学校裏山遺跡 24: 天狗山古墳 25: 八幡大塚2号墳 26: 牛文茶臼山古墳 27: 尾崎西遺跡
 28: 有年原・田中遺跡 29: 竹万宮の前遺跡 30: 竹万遺跡 31: 市之郷遺跡 32: 宮山古墳 33: 行者塚古墳
 34: 池尻2号墳 35: 出合遺跡 36: 上脇遺跡

図1 5、6世紀における朝鮮半島系資料の分布

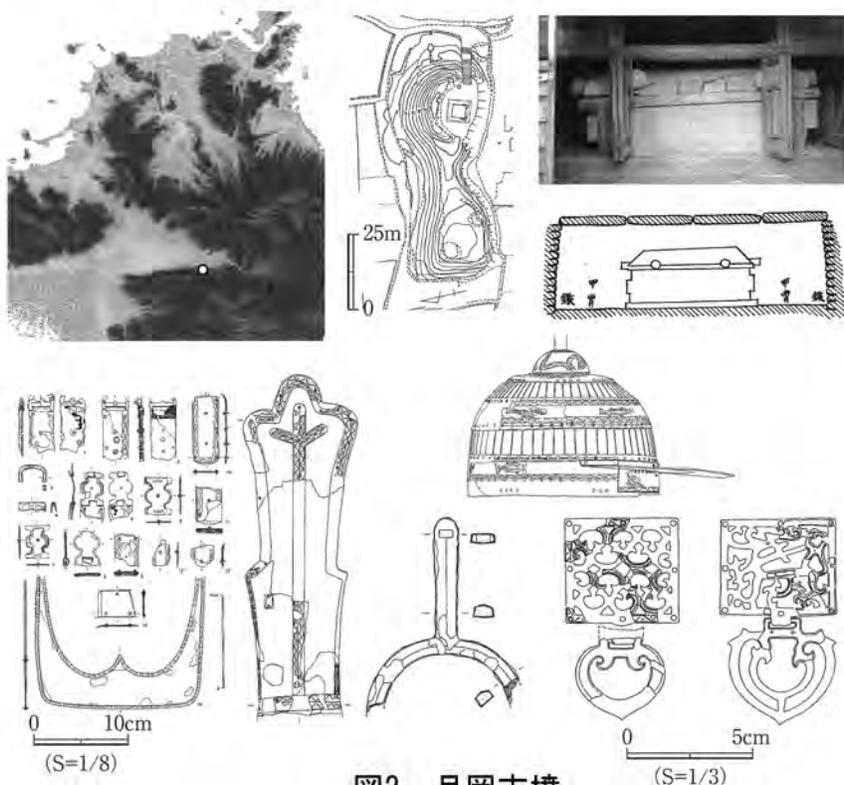


図2 月岡古墳

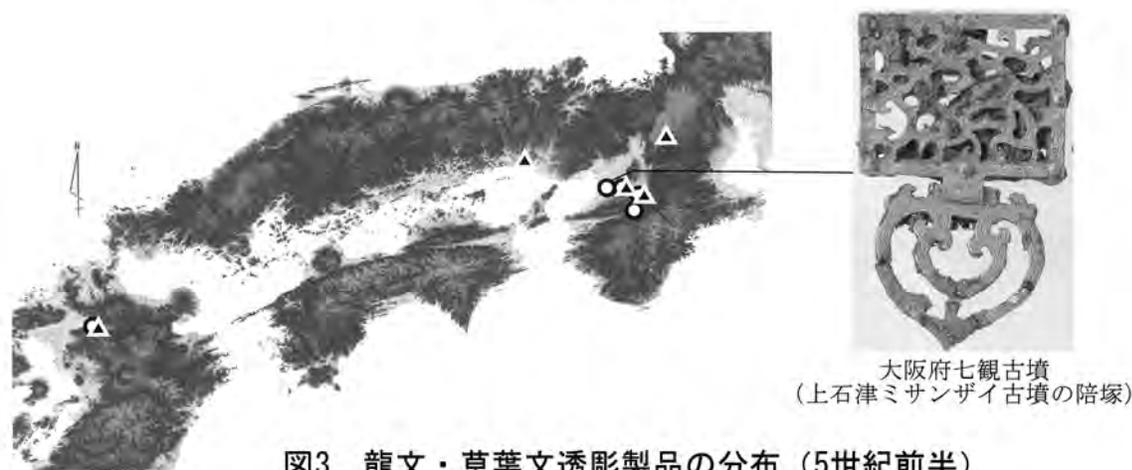


図3 龍文・草葉文透彫製品の分布 (5世紀前半)

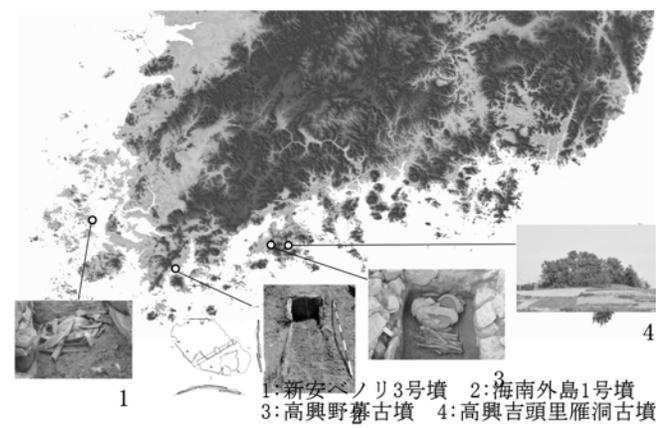
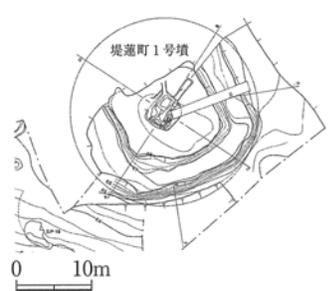


図4 堤蓮町1号墳とその周辺

図5 朝鮮半島西南海岸地域の「倭系古墳」

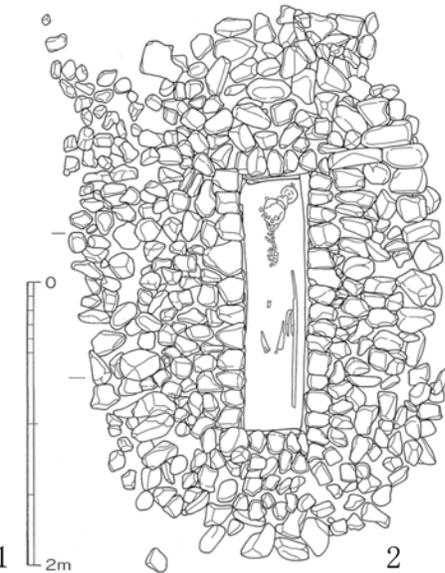
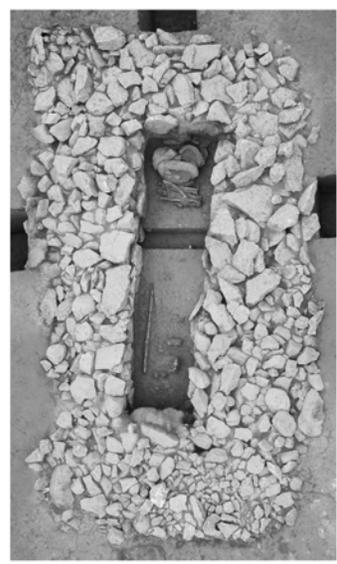
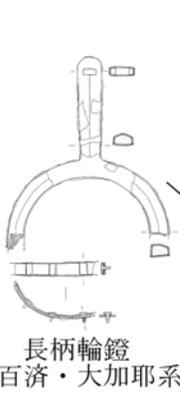
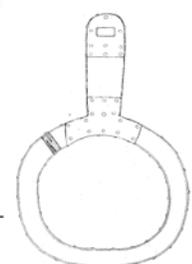
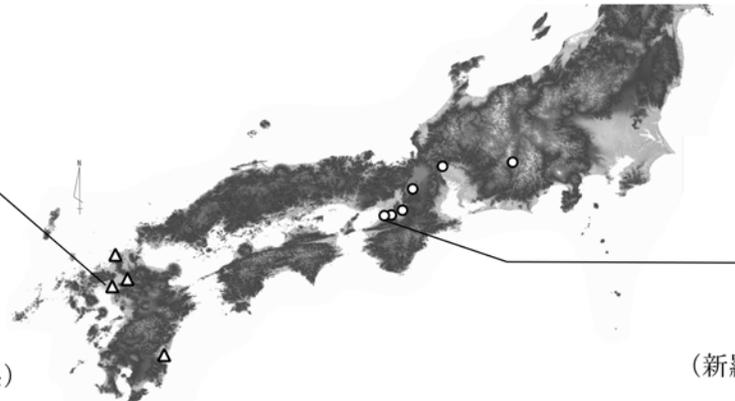


図6 高興野幕古墳 (1) と福岡県七夕池古墳 (2・3)



長柄輪鐙
(百濟・大加耶系)



短柄輪鐙
(新羅・洛東江下流域系)

図7 導入初期の馬具 (輪鐙) にみる地域性

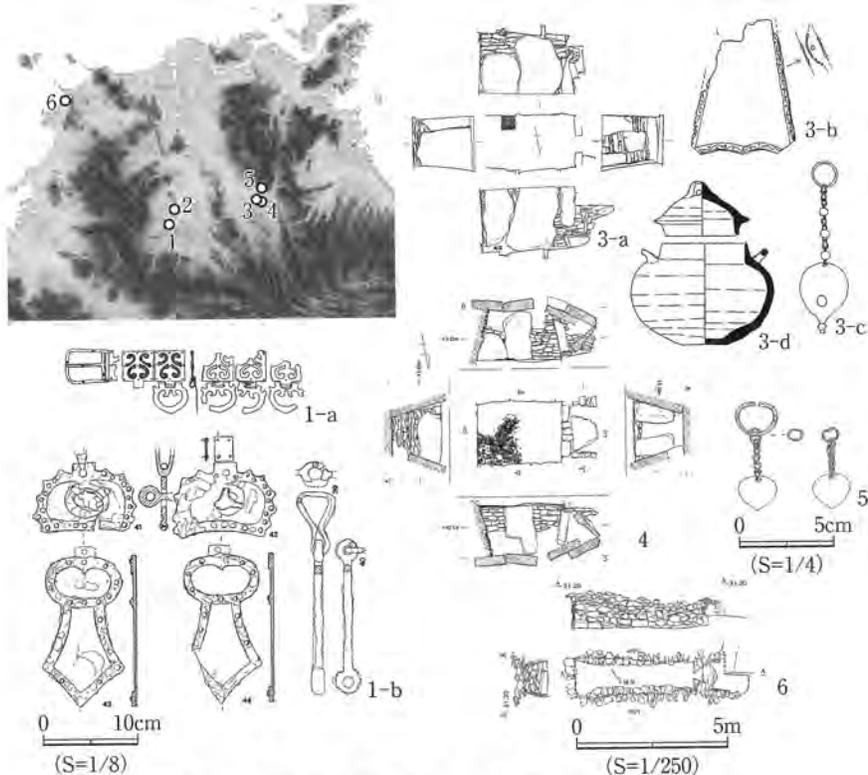


図8 遠賀川上流域の朝鮮半島系資料

1: 樋山古墳 (a 帯金具 b 馬具) 2: 小正西古墳 3: セスドノ古墳 (a 横穴式石室 b 偏円魚尾形杏葉 c 垂飾付耳飾 d 土器) 4: 猫迫1号墳 5: 長畑1号墳 6: 勝浦井ノ浦古墳

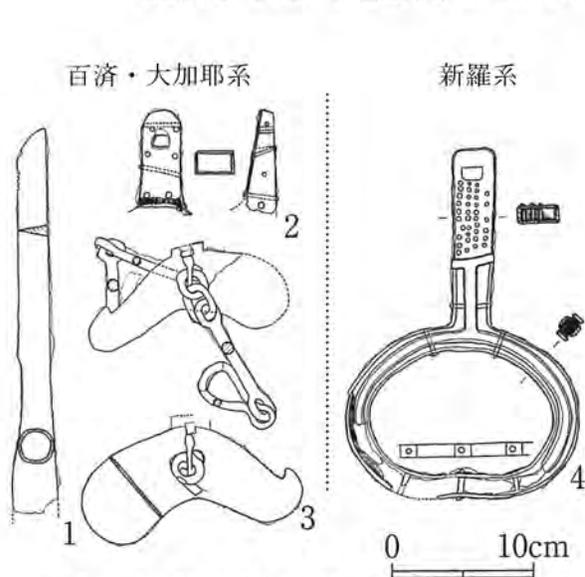


図9 小正西古墳1号石室出土副葬品



図10 朴天秀氏が提示した「大伽耶型の威信財」

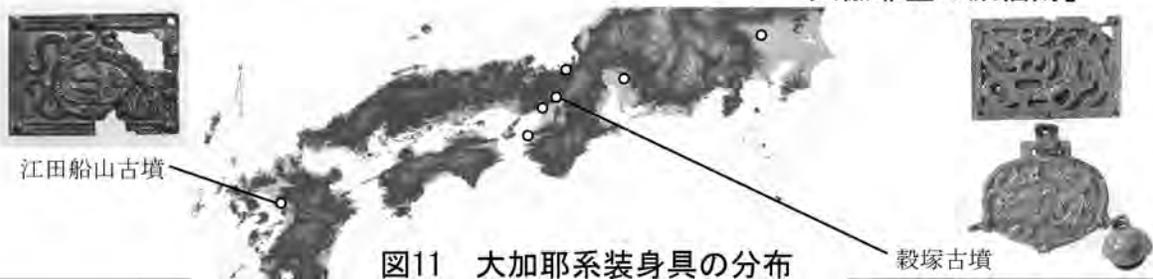


図11 大伽耶系装身具の分布



図13 垂飾付耳飾の分布と系譜 (6世紀前半)

- 1: 半田・宮の上古墳 2: 陣内古墳 3: 日拝塚古墳
 4: 長畑1号墳 5: 立山山8号墳 6: 大坊古墳 7: 江田船山古墳(追葬段階) 8: 物見櫓古墳
 ○: 大加耶系 ●: 百濟系 ▲: 新羅系



図12 中・北部九州地域の多様な朝鮮半島系資料
 左上: 岩戸山古墳の石馬 右上: 立山山8号墳出土垂飾付耳飾
 下: 伝長者の隈古墳出土金銅装鞍金具(後輪)

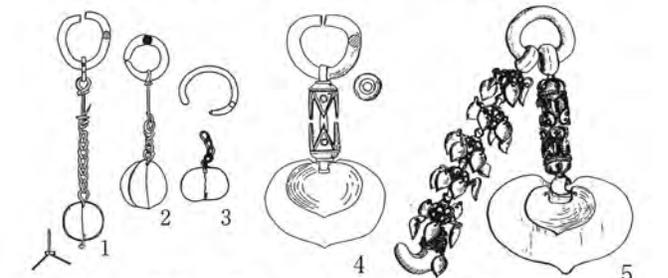


図14 菊池川下流域の百濟系耳飾と類例
 1: 大坊古墳A 2: 益山笠店里1号墳 3: 益山笠店里98-1号墳
 4: 江田船山古墳(追葬) 5: 公州武寧王陵(王)

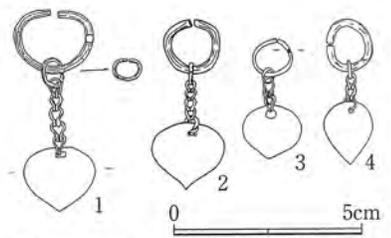


図15 長畑1号墳出土の新羅系耳飾と類例

- 1: 長畑1号墳 2: 義城塔里古墳Ⅱ柳
 3: 尚州新興里ラ地区28号墳
 4: 江陵柄山洞B地区14号墳

玄界灘沿岸地域



朝鮮半島

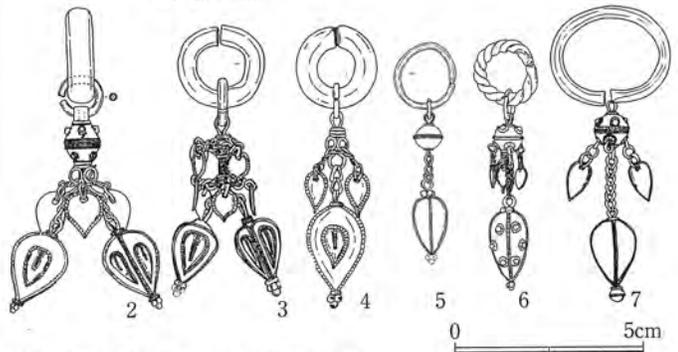


図16 山梔子式垂飾付耳飾の類例

- 1: 日拝塚古墳 2: 陝川玉田 M4号墳 3: 陝川玉田 M6号墳 4: 昌寧桂城 A 地区1号墳 5: 高靈池山洞44号墳11柳 6: 晋州中安洞 7: 長水鳳樓里

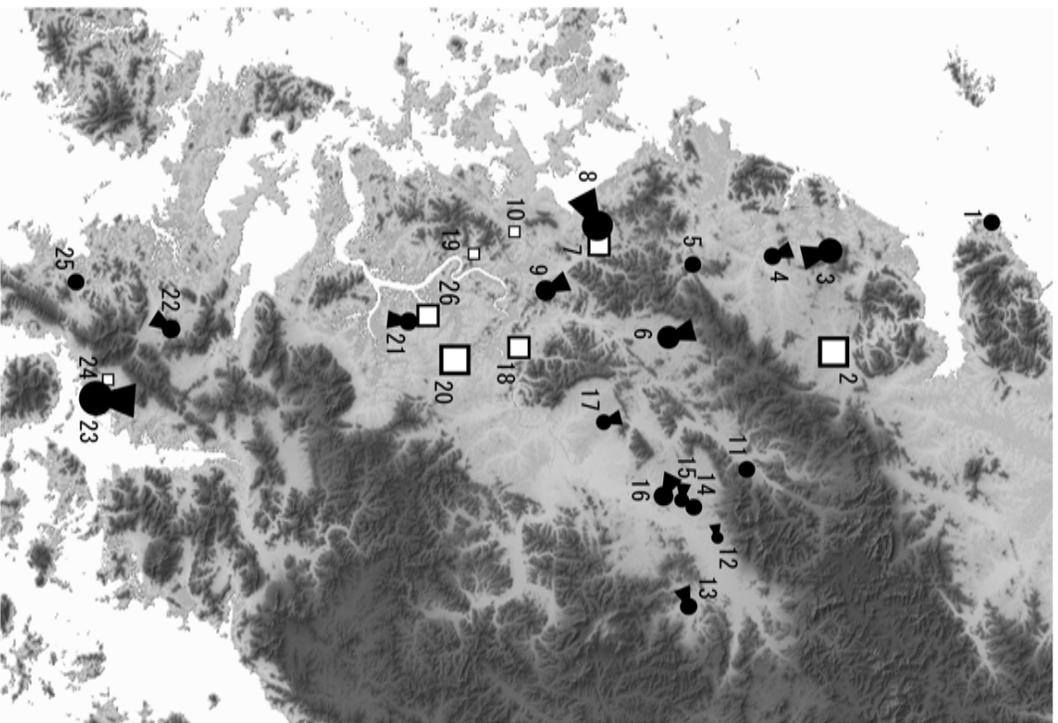


図17 崇山江流域の前方後円墳と主要な在り地系高塚古墳

- 1.扶安竹幕洞祭祀遺跡 2.高敏鳳德里古墳群 3.高敏七岩里古墳群 4.靈光山里月桂1号墳
- 5.靈光鶴丁里ヲチヨン古墳群 6.威平礼德里新徳1号墳 7.威平金山里米出古墳 8.威平長年
- 9.威平龜山1号墳 10.務安高節里古墳 11.長城鈴泉里古墳 12.潭陽古城里
- 13.潭陽豊月里月田古墳 14.光州双岩里古墳 15・16.光州月桂洞1・2号墳
- 17.光州明花洞古墳 18.羅州伏岩里古墳群 (伏岩里3号墳 丁村古墳など) 19.務安九山里古
- 20.羅州潘南古墳群 21.靈岩素洞里ヲヤラボン古墳 22.海南龍頭里古墳 23.海南方山里
- 24.海南新月里方形石墳 25.海南月松里造山古墳 26.靈岩沃野里方台形古墳

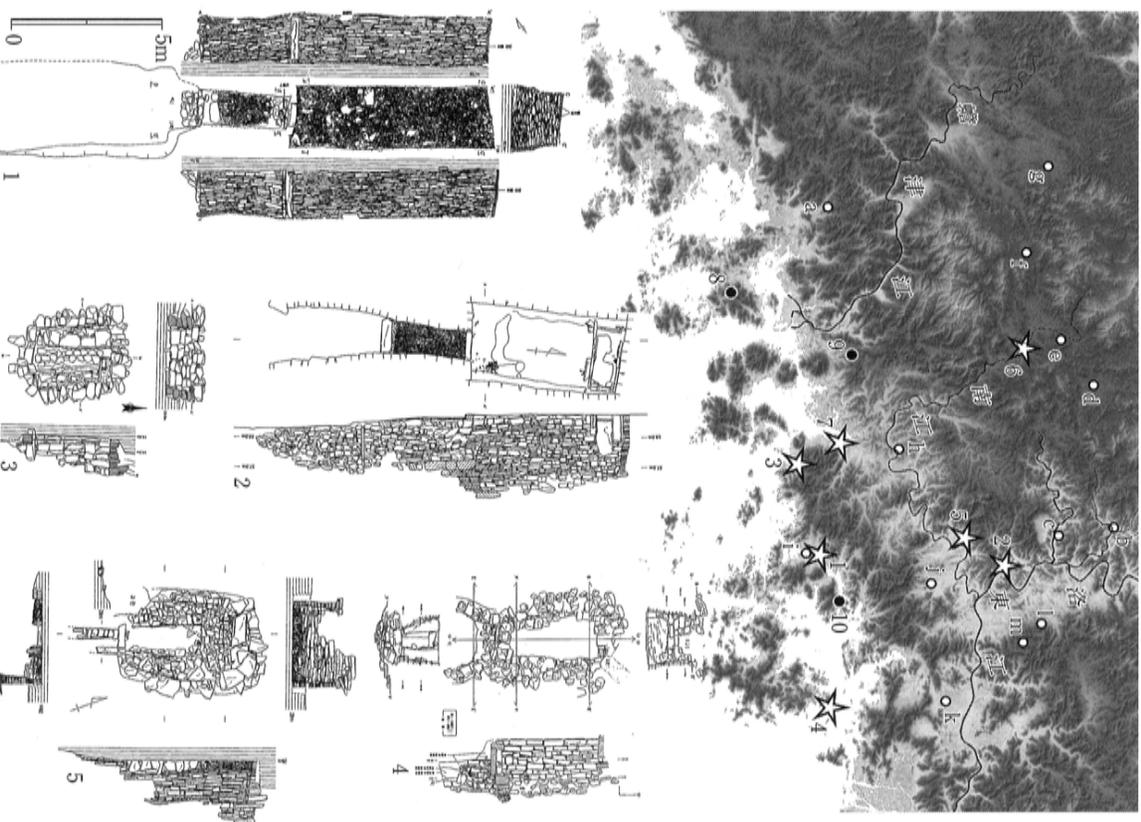


図18 洛東江以西地域の「倭系古墳」と垂飾付耳飾の分布

- 1: 固城松嶺洞IB-1号墳 2: 宜寧景山里1号墳 3: 泗川香村洞II-1号石室墳 4: 巨濟長木古
 - 5: 宜寧雲谷里1号墳 6: 山清生草9号墳 7: 泗川船津里古墳 8: 麗水鼓築山城 9: 河東
 - 10: 固城内山里古墳群
- : 垂飾付耳飾出土 ☆: 「倭系古墳」 ●: 関連遺跡